

巻頭言

真理の呼び声

学長 巖城孝憲

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望むというような言葉を、昔眼にしたことを記憶している。常識を越えた不思議な言葉である。真理も芸術も、人間の知恵を越えた向うの方から、それ自体が人間との出会いを願求しているというのである。

浄土教の思想は、仏教史上の何度かの行きづまりを経ることによって開頭され、全人類に開かれた自覚の大道であると言われている。自己の救済のみの小乗仏教の閉鎖性の行きづまりを、大乘仏教は利他行によって乗り越え得て、救済の無限定性を回復できた。しかしながら、大乘の高邁な理想主義には、そこからこぼれ落ちる多くの衆生を救済することが現実的には困難であった。何かを信じ何か修行すれば何かになれるはずだという人間の理想主義が崩壊して行きづまり、何も信じられない、けれど生きることを意味を問わずには生きられない人間の実存が露わにされる時、真理真実の方から出遇いが待たれていた。すでにこの道あり。人間の知恵の価値判断から解放された広いいのち世界をすでに賜わっていたのであり、見えないものでもあるんだよと言われ、みんな違ってみんないいと、仏教詩人によっていのち本来の世界の声がそこに見出されてきた。

このたび、札幌大谷大学短期大学部開学 50 周年にあたり、第 42 号の紀要が記念号として発刊されることを聞き、紀要の歴史が短期大学部の歴史を如実に物語るものであることを思い、深い感慨を禁じ得ません。本学の諸先生方が日々努力精進された研究の成果の一端を、次の新たな歴史のページを開く学術誌として刊行できることは、誠に喜ばしい限りであります。読者諸賢の方々におかれましては、是非ご意見ご感想をお願い致したく存じ、ここに一言述べさせて頂きまして、発刊のご挨拶とさせていただきます。